



新集

安之部

二

津田文庫
文庫 1
1604
2



倭訓栞前編二

洞津 谷川士清纂

阿の部

あ 木上聲聲音此基の根さす所なり法此語より音と含め
 りよて仲氏も此口正則千声萬音可以次喚出耳と云う大日經疏
 又阿字是一切法教之本凡最初開口之音皆有阿声若離阿声則凡无切
 言説故為衆声之母と云ゆ今そ著しと云ふと云ふなりね○万葉集
 嗚呼靈異記は噫新撰字鏡は嗟とわとあり今わとよむる語乃音は
 かり所謂長呼短呼乃別也○あはれあべりあはれは有と畧しとる也
 ○天吾足畔るるとよめるは皆畧語なり○答への辞は禁秘抄に女官
 中寸沙の女房のせはらん女房のといわとる集韻に阿慢應之声とい
 へり○魏晉己來此語は阿といふ多し阿師阿母阿兄阿妹乃於かり人と
 よぶ語声とす○日本紀は鞆阿の假字と用
 △わく 神武紀の奇なりと云と古事記はわくやニやと云う私記はわく

つた文庫

々咲聲也と云々あり○嗚呼噫嘻吁嗟於戲於乎鳥乎猗嗟嗟夫嗟乎
叱嗟嗟嗟乎嗟嗟と云々ほ世於戲を嘆美と用ぬ嗚呼と哀傷と用るハ
右法と背りといふ漢武紀の嗚呼孔光傳れ於序五行志此嗚呼皆通
用寸小爾雅と鳥呼吁嗟也吁嗟嗚呼也有所嘆美有所傷痛隨事有義也
と云ゆ老學菴筆記と蜀人見人物之可誇者則曰嗚呼可鄙者則曰噫嘻
と云ハ字彙と鳥見異則噪故以為鳥呼嘆所異也といハ司馬遷傳れ注
於讀曰嗚戲讀曰呼といハ嘻通して語と作る猗與も同一猗字語尾の
助辞と作るなり大學と泰誓と引て兮字と仍る字彙と嗟嗟ハ悲嘆之
声と注せり詩經乃注と猗者心内不平嗟是心中暗啞といふ○凡二
字ハ意緩也一字ハ意急也其一字ハ於嗚噫嗟咨嘻都呼呼歔噓嗟慶緊
猗のおく漢書師古注と慶は語讀與嗟同といふ又惡咲と云々驚
嘆れ詞なり孟子此朱註と惡平声歎辞也といゆ粵とよむハ語思惟一
てといハ正附此辞なりといふ○源氏と耳もおかくしかりといハあつた
ふれてわづらといふハ老人れ体也縁兒れ啼聲といハ紫式部日記と云々

△あい 魏志倭人傳と對應聲曰噫イ比如然諾と云々字彙と矣慢イ應言也
といふ○畿内といふと云ハ同韻通と

あいの 阿あといふ此漢書師古注と今人痛甚則称阿と云々○出
羽玉れ結田とあといふハ韻通すなり日本紀と靫田と仍る倭名鈔と膠
とあといふあり愛他れ郡名英多ハ音也○結田城今ハ出羽今と結田城と
あといふ姓此城を是より云々

あいたんごころ 東鑑と朝所と云々大官と云々といふ小山抄と云々
△あうん 阿咩此音なり○獸といふハ嗥嗥なりといふ

△あえ 日本紀と肖字と云々海撰集と
あえ 源氏物語とたつと云々あえと云々わさハあえすそと云々
あえと云々宗祇の語と云々あえと云々あえと云々西州と云々
あえと云々鱈と云々俗字なり○紫式部と云々間マ枝と云々
あえす 枕草紙と云々あえと云々あえと云々あえと云々あえと云々

あゆみと回語をくへしは名物語も是より血にさすともてうあへすもま
別なり○萬葉集より

百枝さしあけ橋をぬくみ身をまきとけぬふむをりけ

又水草れむのゆえぬふともあけなり物ぬといやもや又のちる実いふぬきつ
あえむ此 貫之家集源氏物語にさるるるりあかりとけしんさ

△あま 襖をよめるハ桃花葉葉さるるる音此物也ハやうへし倭名鈔ハあ
まといとるの襖子此義なり青梅も音あうめなる如し新撰字鏡ハ襖を

あまといとるもあまあり○菘れ紙りあまといとる此物系紙さるるる神代紀
此青草束さるるる名なりハ一字拾遺にさるるるあまといとる

あまといとる ○倭名鈔ハ若狭れハ名ハ阿桑とあり
あまといとる 青といふ明小の義ハ助詞也○神代紀ハ青檀城根尊りハ口訣

り青ハ畏るハ古語にといり借字也
あまといとる 源氏物語にさるるるやまざれがさみといひるやれ物語ハ是日なれ

つづくハあまといとる柳さるるるさるるるさるるる木賊色萌葱色さるるるといふ

あまといとる 或ハ羅丹とあり

あまといとる 日本紀ハ白馬とありたよそ物きて白さハ必しもさるるるさるる

とけりハ萬葉集源氏物語にといひさるる○白馬れさるるる三月七日は

あまといとる 禮記ハ春を東郊に迎へて青馬七尺を用うとるさるる文徳實
録延喜式等ハ青馬ともあり漢語抄ハ驄青馬也といり新撰字鏡ハ驄

とあまといとる馬ともみ白色又青色と註せり又水あまといとる嵐あまといとる駟又驂と
あまといとる 萬葉集より

あまといとる 拾芥抄ハ建禮門云青馬車謂之南面僻仗中門と云ゆ
あまといとる 源氏ハさるるるさるるるさるるるハ主上執此法服麴塵也

あまといとる 飛人抄ハ服してさるるといり延喜錄教寮式ハさるるる様綾と云ゆ
あまといとる 神代紀ハ竹カともあり竹ハさるるるカハさるるるさるるるさるるる

あまといとる 了脈の結をつぐは用うるハ南殿此平竹にてさるるる醫師仲成此法なり
たて一乃てセツ作てさるるるさるるるつ法此女房サけるさるるる三滝一統はさるるる

○倭名抄に金銀薄と剪とあり

あをがひ ちる貝に螺鈿といふ白宅編に螺鈿器本出倭國とあり

あをぬび 源氏にぬき洗とあり後代にぬき洗といふ異名沙に荒田にまけ

乃まじまる也とあり胡曹抄に尼にぬき洗といふもさしといふ

あををんる 東鑑に青女とあり或いはまをむるをありゆよま女房とも

ゆ光仁紀に天下氏姓青衣為采女といふあり酒云も青衣を賤

婢に稱しつり小学陳注に僮使也といふ○僧衣に青衣といふに梁法朗に

三論に祖少して青衣を服とあり高麗に惠准も青衣を著三論

と講し雨とあり○命帝著青衣行酒洗爵とあり

あをふり 奈良に枕詞にいつり万葉集に緑青古くかけり神代抄にむじ

奈良坂に青をいつりて畫家此丹青を用ひといふにさしと俗にいふ

岩ろくせうなまといふ石緑やまといふ青丹青とも碧丹青ともすさといふ

あを丹にぬきといふもまをといふもまをといふもまをといふもまをといふも

まをといふもまをといふもまをといふもまをといふもまをといふも

又よとやと色といふけいあり

あをまき 神代紀に青和幣といひり麻を用ひり古語拾遺にまきといふ

あをみづ 万葉集に依網原といひり神代紀に生天吉葛といひり活り

よむり青角髪とすは訓と借する也といふ

あをがさやほ 萬葉集に青垣山といふあり古事記に青垣東山

といふに河室山に神賀辞といふに雲に青垣といひに雲風を記す寂靜坐

國青垣山廻賜といふに一木の名をいふに樹本に記すに青垣といふ

あをうみづ 萬葉集にみゆ祝詞に青海原といふに神代紀に滄溟まに滄

海之原といふに○倭名抄に河郡名碧海といふにまをといふに祝詞に

あをまらひ 康富記に青侍といふに青年にまをといふに生字

此義あり今も未熟ありといふに無位無官に徒といふに或は六位と

いふに祝詞に祝袍といふに祝袍といふに祝袍といふに祝袍といふに

あをひとくさ 日本紀に蒼生といふに古事記に青人州とあり小

人ハ草アリ比まらぬへー

あそみーかき 神代紀ハ蒼柴籬と云ゆ蒼ハ括弧と括弧ぬきぬへー

あそくさづり 神代紀ハ草とよめり延喜式ハ束草とありとよめり是を草とよめり

あはれやま 古事記ハ萬葉心と云ふ字ハれぬくまふといふなり

萬葉集ハあはれをれ中つらるハまねれぬといひかけし鴨ハ羽

これまふとよめりぬしよて是玉集り鴨とまねぬといふ○若狭少

づりちぢれ山は同○源氏少ゆ細流ハ名本少守夏といふ○

あをどりぬきぬ 古事記ハ着紅紐青摺衣と云ふ山藍とすすの衣

よて小忌此事○後廿大嘗會此時ハ小忌といひ臨時祭舞人此者す

ハ青摺と名く裁縫乃さぬかひさるるなり○踐祚大嘗會式ハ小

齋親王門下皆青摺袍五位以上紅垂紐と云ゆ○あをどりハ紙源氏

ハの舞娘ハ紙源氏日ハ唐衣赤紐日蔭髪等と云ふるそめり

此者まふり此紙を用う蟬まら唐紙なりと云ふ

△あつ 垢とよむハ汗氣此をわくへー大日經疏ハ梵云囉逝是垢義と云ゆ

○船中よて水れ事とありといふ冷こととあり又ゆもいふ冷乃染るまをいふ

れらといふ水れ入をて垢といふハ蝦夷此方言ハ水とありといふ是

よめりや○あつ水水の井れあそと属けよめりハと聞伽ハ梵語漢言

鬱勃蒸煮雜香以其汁供養佛也といひ又盛香水玉盃之総名といふ

授こととあり○あつれむハ附むを献るをといふ○俗語あつ他人ハといふ

赤れ赤ハ空盡れ謂也

あが 日本紀ハ吾我をとよめりつがれ古語也

あつ 万葉集ハあつ橋とよめり赤くわらぬこくま反々ツのを略す

○明をいふか反くこ涉湯殿記ハ諒聞此涉あかりといふゆゑ

今も忌めりといふなり

あうー 赤といふ赤ハ日色多水ハ明ハ此をいふ○日本紀ハ赤石とあり

とあり播磨乃明石也延喜式ハ赤石ハ作今海中ハ赤石と出を硯

用ぬを良とす○衣ハ赤とありいふ櫃ハ苗とありへとありとあり○

朱よまづれば赤あまのこみ野客叢書に近^カ朱赤近墨黒とみり
 りごと 日本紀に散亡とありぬとあり散去とありけぬとみり同
 源氏物語に穂穂に^カ此穂に^カ源氏物語のみにと車とありけりといひもあつたは字客は
 源氏物語に^カ此穂に^カ源氏物語のみにと車とありけりといひもあつたは字客は
 ○田舎にまゝと云ふなりとありけりといひもあつたは字客は
 と去とありけりといひもあつたは字客は
 すとつちも同
 へぐく 方系集に高約之足搔アガキとみり東都賦に馬跡餘足とみり
 跡とありけりあり○新撰字鏡に政と鹿のとありけりあり○童への
 躁^カ妄^カ行^カを俗とありけりといひもあつたは字客は
 へぐか 上升といふがら及び自他に是○此れ直れけりとも低昂と
 へ漢書に印貴氏賤とありけり○魚ハ為^カ游潜とありけり其死と升
 ろといふもにたつたといふなり○伊勢人の氣に^カ此れ^カなりとい
 へら雲揚るれ多雨と雲低といふなり

わが 縣ともありかつと通きり和名抄に縣とみりとみり諸縣を

じごぐ 山縣とやまごぐといふあり○縣に神武天皇此湯代よりありけり
 縣邑と治し若とみり後をみり○^カ此府と指て^カ此府一郡と指て
 けり古事成務記に定賜大縣小縣之條に^カ此府は^カ郡とあり○
 條に官ハ禁裡に西北方^カ此れ^カ乃多あり法外官^カ此れ^カ除目乃行ハ
 明神と稱す○^カ此れ^カ太平記に^カ此れ^カ
 洞院の両角と拾芥秋とあり○伊勢鈴鹿郡縣社^カ此れ^カ倭名抄
 不^カ英多ありとあり是に古事記に倭建命御子建見兒王者伊勢別之祖
 とあり姓氏録に縣生日本武尊之後也とあり今峯川崎は社なりと縣大
 明神と稱す○^カ此れ^カ太平記に^カ此れ^カ
 わが 神代記に散字皇代紀に班字頒字とありわつたは是○^カ班田ハ
 今よみ^カ一縣とありとありけり○^カ此れ^カ略とありけり班田倭ハ朝廷より六年
 一一度つて海の田地とみりけり
 一一度つて海の田地とみりけり

わらむ 古事記は赤裳と名ぬれ此記は万葉集は珠裳と名かけり
わがむ 日本紀は重又崇とあり信はつめりしもいふめり反むしわらむ
いふまへ反めく上りしをいふ

わらふ 神代紀は贖とよみ新撰字鏡は賄とよみ万葉集はわらふといはれ
とよみ今つるあふといふ相称は兼も建武年中行事はわらふとい
つがふと基とん所とよむといふ霊異記はわらめてともいふ○薩摩は産
とるわらふと榕といふゆづり葉は似る本なりといふそは草とわらふとい
いふ姓といふ

わらふ 啓明といふ曉は明星に神樂記にもあり倭名録は明星と訓を
即ち歳星に

わらふ 曉といふ日本紀は雞明と訓し万葉集は旭時と有りわらふ
ともあり明時とあり新撰字鏡は昕と有るわらふといふ○万葉の
つぎはくはるといふより曉とあり此は古今一語中此面はくはるといふ
亦つるはる○万葉集は曉降といふ西曉は以道に降といふいふなり

わらめ 常におぼはるわらめといふはわらむといふ日本紀は倭亡といふ
事ともありわらおぼはるわらめといふはわらむといふは今昔物語に
某のわらめといふといひは常葉紙に

大井川岩波といふといふはわらむといふはわらむといふはわらむ
よそみといふはわらむといふ

わらみ 源氏うつや物語はわらむといふ日本紀はわらむといふみて我君
あり怜むといふわらむといふは親之又わらむといふ男女はわらむといふは
神代紀は天稚彦の妻は此辞は吾君とありわらむといふは亦同一

わらむ 贖物といふは福といふはわらむといふは公事根源はわら
むら後拾遺集はわらむといふはわらむといふは雲客所役抄は内藏寮供御贖
物といふ○清後此財は流しわらむは土器を覆ひて其内へひらき入上を紙を
てはる行事官より調進といふ

わらむ 公事根源六月御贖物は条は一日より八日までわらむといふは
てまわら朝餉を主上はまわらむを四はわらむを拾へて上はまわらむといふ

穴とつけて浄息をいふなりと云々

わらひを 古事記は紅紐と云ふ小忌部につくるも此今継は履と云く
物り又紗をたくみてありひ結ひを泥糞をてて解つくる事あり
新勅撰集より

やまのそとすのち赤ひをれ長くそ部は赤よりつる

わらひをす 万葉集は茜刺と云ふハ假借して赤丹指れ目其後細り
いふめら日邊は赤氣と云ふ所謂霞是之今見書此天が紅^ニと云ふ是
なりともと云う管神はよませたまへる

天は赤のひよりひりりふ河を流るるえおへる

有道は神詠より云○紫よりつけらぬ赤氣はよふと云君とつけらる
と朱ら引子なりと云く紅氣といふことなり

わらひをす 日本紀は急字儻忽之間と云ふありぬ狭間此後日
光はちりと指物と云ふ此後ちるるにふと云へていふぬへ雄畧記は取
急取假と訓やう後拾遺集より云々は田舎へり人といふ是也

書言故事の急請假日取急と云々なり假ハ暇と云ふは借は叩と訓なり

注ハ暫也といふう偷間と云ふも急を云う神代紀は天折と訓やハ意は
略しと云なり神武紀は暴風をいふハ波かやと云なり後世白地と云
らるる海と云なり云々云々云々ハ明様此云々云々

わらひをく ぬり引はるる如れぬ此裾は長と云ふなり云々云々
云々云々云々一説は云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

わらひをく 縣召ハ外官は除目といふ京官は對しと云名は正月十日より
十二日まをいふ云々○西土は云々後召と云ふ縣官は召と被と云々

わらひをく 續日本紀は祝詞或は赤丹穗と云々なり日本紀は
熟稻をいふと云ふと云ふなり万葉集は丹の穂と云々云々丹ハ
とと赤土といふも赤と作とを穂といふ

わらひをく 源氏物語は云々云々云々吾佛は後吾念と云々云々

いふ持佛より知る河よりやと伊賀阿我の観音親房伊賀記より
一系集は親鸞上人

あまのあまの二番とけて里人たあやけとや影ひまゝん

あまのあまの 大嘗祭祝詞は豊明明坐皇御孫命とらるる万葉集より

見し明めをまひなとらるる同く天下此等とらるるあまのあまの
おりのまゝんとおのひていふ

あまのあまの 万葉集よりあまのあまのあまのあまのあまのあまの
誠之心とも又清支明支正支直支心とも浄伎明心ともあまの神代紀より

赤心とも清心とも明浄とも仲哀紀より明心敏達紀より清明心ともあまの
あまのあまの 万葉集よりあまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまの 伊賀記より六月十二月此月次家此附調進よりあまのあまの
あまのあまの 赤心とも延喜式よりあまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまの 系よりあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまの 系よりあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまの 三列額田郡西郡三好郡若く今も額をよるあまのあまのあまの
あまのあまの 赤心ともあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

明神よりほり年中行事より赤良曳荷前御調系ともあまのあまの
寶飲郡は赤孫の口名よりて和名抄は安加比古ともあまのあまのあまの
あまのあまの

あまのあまの 秋といふ飽れあがり百穀已は成て萬民飽足れあがりあまのあまの
あまのあまの 秋といふ飽れあがり百穀已は成て萬民飽足れあがりあまのあまの

あまのあまの 秋といふ飽れあがり百穀已は成て萬民飽足れあがりあまのあまの
あまのあまの 秋といふ飽れあがり百穀已は成て萬民飽足れあがりあまのあまの

あまのあまの 日本紀より伊賀阿我とらるるあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまの 日本紀より伊賀阿我とらるるあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまの 乃後ともいふ古事記よりあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまの 乃後ともいふ古事記よりあまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまの 乃後ともいふ古事記よりあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまの 乃後ともいふ古事記よりあまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまの 乃後ともいふ古事記よりあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまの 乃後ともいふ古事記よりあまのあまのあまのあまのあまのあまの

あさつらり 明とあり書とありけしともあり神代紀は湯とあり
靈異記は闇も晰もよみ文選は景もよあり○あさつらり光仁紀は詔は
見行のらべともあり童蒙頌韻は甄とありめとありみとあり○名
は大伴方見とありつらりとあり

あざとふ 日本紀は噉喙傾浮又得言とあり古事記は阿藝登比と
あり肥と強とあり又魚れ水よ浮と口と開と言同やれかつら
といあり蜻蛉日記も手と撥面と振とありれ人れあざとふやうとあり
といつらり

あさつらり 秋津洲と神代紀はさつらり奇とありつらりともありつらり
ふ百秋瑞穂園といつらり同し神代天皇暗吟れたといはるし一義と海
とまかへし後撰集

あさつらり 乃とありあさつらり神れまのりやあさつらり
日本れ形秋津虫れあさつらりは似つらりといふ流もけ奇のむなり
あさつらり 乃とありあさつらり神れまのりやあさつらり

かこしとあり同く

あさつらり 中とありさつらり長秋宮れさつらり源氏も秋れさつらりともありさつらり
又あさつらりやんさつらり奇とあり後成つらり皇太后宮大夫は任せし時

あさつらり 乃とありあさつらり神れまのりやあさつらり
云れ上とありあさつらり神れまのりやあさつらり

あさつらり 乃とありあさつらり神れまのりやあさつらり
くけしとあり古柏は神供供淨を日用れ柏多れは高る人あり

あさつらり 乃とありあさつらり神れまのりやあさつらり
本草唐時立秋日京師賣楸葉ともあり

あさつらり 乃とありあさつらり神れまのりやあさつらり
歎字れさつらり不飽足れさつらり字書嫌も通せり大守もさつらり飽足

あさつらり 乃とありあさつらり神れまのりやあさつらり
乃とあり新撰字鏡は嫺とありさつらり

あさつらり 乃とありあさつらり神れまのりやあさつらり
△あさつらり 明とあり神代紀は開も同し○飽とあり秋とありさつらり○人
さつらりくさつらりなつらり厭れさつらり上れさつらり奇とありあさつらり
さつらり○倭名鈔は灰汁とあり祭統考工記は洗水とありさつらり飽の
後つらりさつらり俗語もさつらりさつらりへし源氏も奇とあり

○幄と音少くも呼ぶ幄屋幄座をいふ

あぐ 上字奉字揚字をいふあり俗にあげぶともいふけるあぐこ
埃囊抄酒どあぐぶといふ醜字ありといふ倭名抄いけさくじも
いふなり○鼎は扛とちり首は翹足は躡色は發書は揚字はれ
○常陸詞はあげるといふとさけるといふ

あぐら 胡床をいふ古事記は吳床ともいふ足座はまじ玉纏は胡床
倭文纏の胡床をいふ日本紀の奇はまじり俗に床机といふなり○坐は体
すいふも同しよそかくといふ○竹は物種は今の足代はまじり

あくび 欠といふあり飽ぶりれをいふ新撰字鏡は吹吐をいふ聞
出氣之負と注せり

あくたぶ 倭名鈔は淋をいふ灰汁をいふ今もいふは他はる若を
いふてあくたぶといふは是なり○悪むといふは灰汁はれ滓はむ
といふ諺は唐傳奕々懲沸羹者吹冷齏といひ拍案驚奇は一日喫蛇咬
三年怕草索といふも同じくはれは文房清事は淋過敗灰といふなり

あくたぶ 倭名鈔は糞堆を訓せりふはけは糞今もいふはく西之○俗語は

あくたぶはけの物やいふや又悪熊は音もや古事記はんゆ
あくがら ぬいふはけといふなりかきと同くはく反うは古今集雅抄は
はちちちぬいふ字宿ととみえたりうかきとみえたり又はかきかき
なりといふなり

△あけ 明と赤とを多くはかきいふなりぬいふはまはれは○事とあけ

あけがれ 曙をいふ詩経は明發をいふ日本紀は會明昧爽古事記は開明
かきとみえぬいふておはけのなはぬいふはけといふは浦をい
ともいふなり○奇れは春曙といふは花をいふもいふはぬいふは
来りり二月の初めはぬいふといふ○牡丹は救荒本草は銀條菜
なりといふ

あけがれ 文選は昧爽をいふありあけやみともいふはぬいふは
暗くある所なり拾遺集

ねびくけひらりしれゑふゆりうとやぬきしんねりあらん

鶴林玉露は天之將明必倏暗而後明と云ゆ

あげりり 日本紀は幕とよみ倭名鈔は幄とよめり上下四方悉くまよ
て宮室は多うとよめり揚渚の義なり

あげまさ 新撰字鏡は髻とよみ角とよめり集韻は髻音總

與髻同馬鬣一曰髻角とて正字通は束髮謂之總以布為之と云ゆ
結纏の義詩の注は結髮と云へ結髮と云へり○神宗は
あげまさとわさ田とやりて梁塵抄は上童といふ男女ともいふ詞と云へ
さうさしと女といふは李時珍は、髪は女もあげまさともいふをわさ田とつらま
はうといふ牧童といふはへり捨き思ふなり

あけまさのひらりしれゑふゆりうとやぬきしんねりあらん

○あけまさと結てあつちから車鎧とよまふ糸はかみと云へり流角は
似うとく流蘇と訓まへ唐詩選は流蘇帷帳間所懸五綵同心下垂者曰
流蘇と云へり流蘇物なり

あけまさのひらりしれゑふゆりうとやぬきしんねりあらん

○鎧は東方と義訓ヤハらんやうむまびは据と云へり○介品は名は呼ら
海燕のこれと云へり結び一形は似るく煙といふはまては似て肉は紐と云へ
と云へり一説は即めると云へり

あげづらふ 日本紀古事記遊仙窟は論字と訓せり遊仙窟は平章と云へり

めりあげハ奉はけらふと云へり海といふは辞引づらふ掛づらふの如しらあるし又
奉衛れまや言奉し照しといふこと

あけのそふ 万葉集は赤曾保舟と云へりそふハ楮は丹塗といふこと

漢土は紅船と云へり

△あこ 網子にまゝ今あみこといふ網を引とて網子と云へり

あびり子と云へりあつちからと云へり○下火とよむは唐音は國華合記集
り蘆と下室と云へり○西列は緋魚といふ赤魚は後伊勢にてハあつち
と云へり○播磨の赤穂と云へり呼ハか不反こと

あこ 吾子に親ひ辞なへし神武は阿誤と云へり子と云へり

いづらぬへし乳兒と呼てあごといひし事うらふ物語よるなり万葉集
系大后此は可とを法河と呼てあごといひ職人秋合よあごやう管とて
こころとあつとを是くあごせともいひ菅原此幼きゆりみなり可とを
梅此を屋よ此よふもゆるるあごが形ゆもつくへかりあり

菅原系圖は菅公此幼名も阿兒とまり○吏部王記は元興寺此僧童子
なり阿あごといひ著聞集はあご法師といひ小童子といひ法探第
亭子院よいまあごといひ人勅續古今集は傀儡あご又此小松院乃法
法不よあごといひ一休和尚はらごう腹とごう法成此抄は母とごう童名内
教坊のあごといひつらむよ名もつひくといひるなり太平記は田樂此名
あごといひり○地閣と譯す全浙兵制よ是ゆ

あごめ 梁塵秘抄は賤と女といふとるなりあごの吾子めいといひ此稱は
あごへし○相とよめは倭名抄はあごめといひあり袖とよむはあご守右此
あごめ此きる服も水に同しといひあごへし唐韻は女人近身衣也と註あり
一説は赤澤此あごといひりかそ及こ也五節は菖蒲打袖はあご延長或は襦と

よあり説文は短衣とて是ゆ童子此汗衫此下ははは又二も三もかきぬるゆとい
屋りさしと大宰大貳此とごう事大和物語はあごといひ男女とも小用あご
わくへし○扇はあごめといふも同し○三議一統は美此あごといひり
あごえ 日本紀倭名抄は雞距とあり新撰宮鏡は距一字もよあり脚小
股此あごといひりつめ

あごやれさま 阿古耶は所此名尾張此知多部より又奥列よりといひは
こい吾子此あを龍の神や呼けぬへし新撰集記は阿久米とて是ゆ万葉
集此龍とてあ帳よりこやたまといひるなりとて龍珠はあごといひり
いふりりむごひといひりわ初の浦を胡蝶見といひは此あごといひり神貞といひり
是世よいふ伊勢志保此上赤澤よ是と蚌珠といひりなりあご草あり
あごやれといひはあごを移して室此海とて是ゆなりあり
あごは海流相といひ貝より多くあごといひりあり貽貝此珠は尾張志保なり
といひり又あごはあごといひり○室方申此あごを先づあごといひり
乃名も同し今此あごは属せりといひ

傳言集 卷之二

みらねこれのちれきよふかむてゆふ海にゆもやうねり

△あさ 朝のあけぬくことか之狭之考は姑方云はゆらうとよりすら
反さ也○麻とあは漢を多し麻は狭衣をとり或は青割れ白袴はゆら
ゆる言也袴を白和幣と一麻を青和幣とす○麻とをさ此具とし又麻
はを流すととく奇まるとありねる奇よ

あさうしつらそを此種をうふはちえよとて凡そすしつら

○あさがらう古俗拾まは麻柄とんこと○麻はつらうとてとら鏡の
荀子は蓬生麻中不扶而直とんこと新勅撰集は系恭時

世中は麻のあまくぬりよりゆれゆら乃蓬生とて

あさの 朝霞のうらさあまのすいらす○朝まのいもを同し

あさふ 三代実徳は童謡あまのり回りのうらうらとむとんこと新撰字
鏡は鯛とあさうとむとありあさのうら捜字とあり信よあせうとあさふ
是なり万葉集は求食とむ文選は搖尾而求食とぬらうゆらうとて
足搜れぬともり定ぬれらうらびあさうとむ信はあまはゆらねる

あさあされともさあ海あすもあすともいふ詳なるゆらへ

あさり 雲根抄は朝は漁アすは波のうらとひなはすらとらうとあは東は海
人此にゆらみこととり万葉集は渡廻とらうすうとあは美とて訓せり
さの浅はあはれあなるまや○十訓抄は三井寺覺讚の奇り

山川はあさりとなくく流るあは流る信は名をやわらうん

あはれ海國は阿爾梨はあさふはゆらとんこと○浅利與一義遠は壇

浦そ遠矢は名をゆら板額を娶一人也

あさうし 浅といふ朝と美色一川の助け加へ

あさへ 神代紀は財とみ童蒙頌韻は又をあり雜へ支ふれとらうとい

魚り信よまをるをゆらとらうさの合を交るあさへ

あさうし 近春歌あはれゆら今ゆは漢葱色は美ゆは縁はあさの

魚り権記はあさうし○水はゆらと縁はあさの月白あり

あさうし 字をゆらり交名は美一人は交りよりゆらる名はあさうし○字を

阿三那と譯せし中山傳信録はよく梵語は悪刹那といふの俱舎論より

足ゆきの文字此字也○堂生入字此付文章院の堂監、字くさす名籍り
らふありて儒者なるは必すあまつくさるる源氏此抄より
は世に俗諺名をいふことありて字拾遺よりいふことありては
いふ○同此名とありていふ字此名なりていふことありては
てやぬことあり

あつて 明日といふは去ては昨日といふ事なりては西土の聖日
と明日といふは去ては昨日といふ事なりては西土の聖日
といふことありては去ては昨日といふ事なりては西土の聖日
あつてあることありては去ては昨日といふ事なりては西土の聖日
は日とありては去ては昨日といふ事なりては西土の聖日

あかか 朝起の影をいふは式部日記より影朝かかたひやう海
ることあり○倭名抄に牽牛子とあり物影の影をいふは
つる事なりては去ては昨日といふ事なりては西土の聖日
物影の影をいふは式部日記より影朝かかたひやう海

○万葉集の朝果とあるはかう此音をかりて物影をいふ事なり
とよむハ申のよりとあるはかう倭名抄のいふことありては西土の聖日
なりては去ては昨日といふ事なりては西土の聖日
名はよむハ申のよりとあるはかう倭名抄のいふことありては西土の聖日

いふことありては去ては昨日といふ事なりては西土の聖日
又かういふことありては去ては昨日といふ事なりては西土の聖日
いふことありては去ては昨日といふ事なりては西土の聖日
いふことありては去ては昨日といふ事なりては西土の聖日

らざや、 遊仙窟は驚新なるは鮮とあり明さやうの事なりては西土の聖日
やぶともいふ事なりては去ては昨日といふ事なりては西土の聖日
けし及ては去ては昨日といふ事なりては西土の聖日

鮮味といふ雉を梅の枝に附くると密柑と搗栗をひげ花に入れて松の枝に附
くる也主基此鮮味ハ危を楓の枝に附くると鶴を麻の草に附くると附くると
かりととり

あざびく 欺誑といふ新撰字鏡に讀まむ誤又譚をみ和名抄に虫を
よめり誤り有るをなぐへし信よまますといふ是の如く病をむとらむむく
とよみしとむすといふはむく信を冷艶全欺雪れ白みつへし

あざける 朝をよめり新撰字鏡に嗤といふ誤り此をなぐへし人を誤りし
きみするといふ

あざけりけ 朝をよめり新撰字鏡に嗤といふ誤り此をなぐへし人を誤りし
今集よりとるべきなり

あざびくさ 万葉集は朝用とてはよみてはさぐけの如くしては先
流はあざけりけにあざびくさは流は特しく是也といふと万葉集は皆船
此事はたよめりはこれ流なりともいふ或は遣唐使開船居祭といふ西
土の七開洋此名なり

あさめりく 古事記よりとる朝用好此名なり今もいふ辨ことなり
江流は又大嘗會此條阿佐米主水ともいふ悠紀主基薦享此事畢
して采女還申此事なり此辨はあさめりくといふあつさ此みけたひらに
つんまつりけとすし勅答はあさめりくと宣ふなり
あさめりく 万葉集は明去者といふけり暮去者といふけり報いり此
報いり及さ也

あさもりり 万葉集は木人木川まき木上宮城於道なりと冠らしめり
了本は紀伊といひ城於大和の地名に例皆なりといふなりといひと讀むるは
中流より訛まるとして麻裳吉木道尔入立生法山とあると正義とす是麻
此裳とらるといふはよめりけりといふなりといふなり

あさめりく 麻の草もいふはあつり本此玉のよめりけり麻まけりといふも
さよめり衣といふも裳といふも同なり是れは紀伊といふなり名は負
小本此玉を神代は八十木種を殖しめられあさめりく材本此玉なりす
麻もいふは是れは玉といふなり

原中ぬきりあり○白く條ありを難波りといふ○箒葉は黄く澤水
猪ぬき葦を利りといふ○葦火葦屋葦垣葦葦茨葦帳葦か
り○汽船葦は多しなりを難波にてあるハ錢といり錢神論は無足而
走といふは据えよそ料足用脚をこれ給も記さう○りはうふ
根よりとをぬく東記のまゝといふ湖○器物は是も記さうといふ事
類聚難波よるゆ又猫りといふ

わーた 朝旦やとありあて及てといふと國○鄙俗よあすといふ
魚さといふともいふあり○蘆田ハ信濃依之類之米持氏あるハ武衛少
家人帳よ出さるる源義隆といふ

あぶら 延壽或は網代といひりありハ氷菓とさうんとて百千此机を網
引形よりいふ本またてぬきといふともいふ貴といふともいふ
る本ともいふらんといふりありの庵ともいふり西上此事ハ魚箔新
簾やといふ是ハ新葉集よりいふともいふあり○網代車網代輿網代笠
なりハ字を借あり室のむくはありといふ源氏ハ網代扇風もいふ

くろ 河海ハ蓬アサロ屏風とて漆骨といふ面をとりて細き組をてり合を
くろ地なり昔ハ山莊をいふありかといふ調子ハ宮ら事といふといふ
童蒙頌韻ハ蓬蔭といふあり又いふを天井とせし事世継物語ハ是の
○魚といふ讚列の方言にふありといふ○ハ條貞阿ハ惟康親王を廢也
將倒アサロハ網代輿ハ載て京師ハ帰るといふあり時人將軍京師ハ流さる
といふいかり例といふ

あーと 日本紀ハ蓬をいふ和名ハ學とて新撰字鏡ハ聯とて蓬ハり
といふあり足緒ハ足革といふ蓬ハ具とて又山足緒といふ其制ハ異こと
といふ管ハ蓬といふ

あーと 新撰樂記ハ葦羊とかけり源氏よりいふ此系紙ともいふ
けいりりーのいふさまはと難波れうといふかといひてむき修補よりいふ
色葉ハ芦ハ葉ハ申ハ文字とて水石多なりハ形もあさすといふ
いり修者物語よりいふともいふ天徳寺合此序もいふ机のりハゆ
らみむいふありはすといふりハ修補といふともいふり

おろおれ此の此の... 色... 手書... 又悪字...
おろおれ此の此の... 色... 手書... 又悪字...
おろおれ此の此の... 色... 手書... 又悪字...

わいびき... 日本紀... 脚日本... 私記... 山行...
わいびき... 日本紀... 脚日本... 私記... 山行...
わいびき... 日本紀... 脚日本... 私記... 山行...

本此... 倭名抄... 新撰字鏡... 金牙...
本此... 倭名抄... 新撰字鏡... 金牙...
本此... 倭名抄... 新撰字鏡... 金牙...

あかび... 神代経... 葦牙... 斯河備...
あかび... 神代経... 葦牙... 斯河備...
あかび... 神代経... 葦牙... 斯河備...

是々... 葦筒... 葦... 葦...
是々... 葦筒... 葦... 葦...
是々... 葦筒... 葦... 葦...

あしひ 倭名抄に倭俗謂鶴為葦鶴と云々日本紀に川雁と云々の
うめし 禁中抄に筆乃名はあしひと云々筆を系集りみゆふに西鶴は義
あつと 鴉尾琴と云々徳和の長曆官符に云々あしひは足跡也
あつと 衣笠内府

あしひはあしひと云々あしひはあしひと云々あしひはあしひと云々
あしひはあしひと云々あしひはあしひと云々あしひはあしひと云々
あしひはあしひと云々あしひはあしひと云々あしひはあしひと云々

あしひ 和名抄に脚病脚氣と云ゆり此はあしひと云々の今此脚氣
御達と云ふ源氏物語に云々あしひと云々の亦脚病也云々
續日本紀に縁脚病徒櫻井頓宮還と云々あしひと云々の亦脚病也云々
あしひはあしひと云々あしひはあしひと云々あしひはあしひと云々

あしひ 靈異記に覺和名抄に蹇と云々あしひはあしひと云々の今此蹇
奇の葦若末乃足痛吾勢と云ゆりあしひはあしひと云々の亦蹇也云々
あしひはあしひと云々あしひはあしひと云々あしひはあしひと云々

と蹇と云ひひと云々の今此蹇と云々の今此蹇と云々の今此蹇と云々の
蹇と云ひひと云々の今此蹇と云々の今此蹇と云々の今此蹇と云々の

あしひ 神代紙に強暴と云々の今此強暴と云々の今此強暴と云々の
刈業と云々神代紙に強暴と云々の今此強暴と云々の今此強暴と云々の
と云々の今此強暴と云々の今此強暴と云々の今此強暴と云々の
國圖に室韋はあしひ海は東國の地名也と云々の今此強暴と云々の
と云々の今此強暴と云々の今此強暴と云々の今此強暴と云々の
と云々の今此強暴と云々の今此強暴と云々の今此強暴と云々の
と云々の今此強暴と云々の今此強暴と云々の今此強暴と云々の
と云々の今此強暴と云々の今此強暴と云々の今此強暴と云々の

あしひ 丹後と云ひひと云々の今此丹後と云々の今此丹後と云々の
あしひはあしひと云々の今此丹後と云々の今此丹後と云々の
あしひはあしひと云々の今此丹後と云々の今此丹後と云々の
あしひはあしひと云々の今此丹後と云々の今此丹後と云々の
あしひはあしひと云々の今此丹後と云々の今此丹後と云々の
あしひはあしひと云々の今此丹後と云々の今此丹後と云々の
あしひはあしひと云々の今此丹後と云々の今此丹後と云々の
あしひはあしひと云々の今此丹後と云々の今此丹後と云々の
あしひはあしひと云々の今此丹後と云々の今此丹後と云々の
あしひはあしひと云々の今此丹後と云々の今此丹後と云々の

葦原ハ葦花ニ對シテ云々○葦原中國ハ此邦此号アリて天
は神代世ヨリ天系ヨリ宣ハる河チテ天ト對セリされトけルモ
天降坐テ移ルモアリテ呼ハる号ニ宣ヒテ何方モ皆葦
系アリテ呼ハる所ハ新ハるけり成ニテナリト云○文德實錄ハ天安
二年伊勢宮葦原社御官社ト云神名式度會郡葦原神社ナリ難波の
葦モ伊勢此濱萩ト云ハお尋ナラセ

萬葉集ハ難波ニ屬ケル葦花ニ對シテ云々古事記ハ
射出之矢如葦來散ト云ゆ來ハ詩此來辭の來ト云ヒ云々或ハ
華此流寫ナリト云リ本草ハ蓬葦葦花名ト云ヒ唐詩ハ憂魂一夜泊
蘆花ト云ゆ苕也ト云

芦花植ニ對シテ云々○小窓清記ハ製柳絮枕蘆
花被以連牀夜話ト云々○○○
植ハる所ハ新ハるけり成ニテナリト云○
あハる所ハ新ハるけり成ニテナリト云○

砥石集ハ應向ハ足踏立ぬト云々○所住アリて杖つくは此地ハおぬ
ト云々○林氏此流ハ應向ハるけり成ニテナリト云○
ト云リ是ハ白氏文集ハ匹如身後有何事應向人間無所求ト云々
ト云々○
あハる所ハ新ハるけり成ニテナリト云○

△あす 明日ト云ハるすの系ト云々○
り目ト云ハる本日ハ書牘ハ明幾日ト云ハる通鑿ト云々○
鏡ハ冊ト云ハるハあすハるけり成ニテナリト云○
簀此上也ト云

あすハ 常陸國鹿嶋ハ阿須波明神ナリ前立此社ト云ハ新千載集ハたの
しそハるけり成ニテナリト云○

唐中世の此神は小紫とありていふらん如くすまてり
 古事記は庭津日神次は阿須波神とありていふ唐中世神とあり小紫に
 比金比とあり松杉此等ありていふ向くこと見安とありていふて旅出るといふ
 不ぬへし首途と麻路立といふも是より出るといふ麻島本縁のみえ
 とありて本社より記する禱ありていふ○城前郡名は足羽とあり足羽の
 神社は繼體天皇ありとあり傳中後月郡足次倭名抄ははとありていふ
 足次神社とあり

△あせ 日本雄略紀の奇古事崇神記此奇はあせとありていふ吾兄は崇
 め報むの禱○海川はあひなとありていふ万葉は漢字とありていふ又荒
 きふもといふ流御草此いぢぢん代もかゝりあせとせんといふいぢぢり
 ○汗ハ熱湿の氣あめ反せ汗水といふ語平泉物語はんていふ齋宮此忌
 詞は血とあせといふも似ていふとあり○論言ぬ汗といふは神祇記より王
 言如論といふ渥まり号令如汗出而不反者也といふていふを合せといふこと
 あり○汗とぬぎら元史は握兩手汗まぬ○阿瀬川城は記河内

あせくら 和名抄は校倉をいふ今昔物語は宮治拾遺よりいふあせはま
 の美かきへ一方あるを打透へて井樓の如くといふみぢぢぢ本は角をぬへ
 けいけいといふ下字集より又庫とあり新猿樂記より又倉甲藏といふ俗は
 あせりといふといふ○姓は時籠といふ○山陵は用ひて事貞伝は
 記はまゆ○山の抄は校屋あせといふあり

あせぢい 神代紀は緒繩といふり畔の繩はあせといふりといふすこ
 △あそ あそといふを古語はあそといふりていふや日本紀は吾二人
 在何無人耶故号其國曰阿蘇とありていふあそ韻通せり万葉集はあそを
 といふも何とも也といふこの阿蘇は肥後此阿蘇山は桓武紀は肥後言
 阿蘇山神靈池水涸世餘丈とありていふ河勢は阿曾山は東鑑はんていふ○
 阿蘇大宮司宇治惟直は菊池といふ氏を拒んで自殺とあり○阿曾時治は高時の
 義子也楠赤坂の城を陥る者也○日本紀の奇はうら此あそといふあは
 氏内宿禰といふて万葉集は人といふていふ朝臣はあそ
 一説は吾兄より出るとありといふ○万葉集はあせといふていふ

あそみ 阿曾美とかたり私記に我身は副此帝相親の親
とては後と朝臣と填しはあそむは後とあそむ朝の朝廷はあそ
らそ此朝臣とて別せうあそむと唱ふるは音後なり阿曾美も相副
臣の義ありし條は此を色し独断は公卿侍中尚書衣帛而朝日朝臣
諸官校尉將大夫以下亦為朝臣と云ふなり○官位同答は昔六位の若
し姓よつて朝臣と云ふも後多御流より後ハ禁制ことあり○上院
由多胡劫碑は左大臣正二位石上尊右大臣正二位藤原尊とかたりはそん
此所を略書せしなり

あそび 倭名抄は遊女と云ふなり詩の漢有遊女と云ふは記しはるなりや
後名物傳はあそびは此も後なり母は此なり
あそびは此なり母なり此なりそめては此も後なり母は此なり
あそびは此なり母なり此なりそめては此も後なり母は此なり
あそびは此なり母なり此なりそめては此も後なり母は此なり
あそびは此なり母なり此なりそめては此も後なり母は此なり
あそびは此なり母なり此なりそめては此も後なり母は此なり
あそびは此なり母なり此なりそめては此も後なり母は此なり
あそびは此なり母なり此なりそめては此も後なり母は此なり
あそびは此なり母なり此なりそめては此も後なり母は此なり

了喙細長也とて○遊北岡と大和馬海船前吹波此は此なりは
前吹波社此は此なり音はあそびは此なりは此なりは此なり
池を前吹波此なり

あそぶ 遊字と云ふは日記は道遠と云ふなり○所遊ハ樂と信馬樂と
つづきなりなり古事記は本づくはなりなり○喪此内は遊やなりなり舊
事紀古事記は此なりなり今もなりなり此なりなりなりなりなりなり
なりなりなりなり延佳ハかなりなりなりなりなりなりなりなりなり
宴此はなりなりなり喪葬令此遊部も此なりなりなりなりなりなりなり
遊部ともなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

あそぶ 古よりき入此事をなさるなりなりなりなりなりなりなりなり
其大御琴と云ふなりなり遊び坐也びまら也あそびなりなりなりなりなり
今ハ遊字を用ひて云ふなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

△あた 神代紀は咫とありあは後信たは此取手して量るとその
 かるへく古事記は六尺とありなり○ 雉とよむも當る此取敵討此とあり
 日本紀は虜とありなり盛衰記はあはらとありなり○ 怨と思て後
 ぢらとありなり怨は怨を怨とありなり○ 怨と思て後
 あはらとありなり怨は怨を怨とありなり○ 怨と思て後
 少とありなり○ 万葉集は此字とありなり玉篇は口毀也とありなり今
 此部とありなり

あた いろろあることありあは波あは名あはあはらとありなり
 波は漁もなりなり海もなりなりやうは波をいふなりありなり
 波はいろろありなり一説は神阿多都比賣亦名木花之佐久夜毘賣所は
 りる此あはらとありなり○ 抄撰字鏡は調とありなり○ 阿陀の
 大智ハチ和宗智那也也大智とありなり○ 阿太養鵜部のこと也

あゝ 他字異字なりとあり日本紀はあゝとあり餘字はあゝとありなり
 あゝとありなり一詞の助けなりあゝとありなりあゝとありなりあゝとありなり
 略もあゝとありなりとありなり名寄は法法なる名はあゝとありなり
 略もあゝとありなりとありなり

あゝ 直字とありなりあゝとありなり當易の義てか及たん字書は直準
 當とありなりとありなり延喜式は估とありなり價も同○ 姓は直をあゝとありなり
 也同義として日本紀は費直とありなり又あゝとありなりとありなり當得れ
 るからなり續日本紀は費此一字とありなり用なりとありなり三代字録は費字を
 用なりとありなり事なりとありなり○ 姓氏録は直者謂君也とありなり宜汝
 為君治之の詔は就てほせとありなり

あゝ 與とありなり神代紀はあゝとありなり八寸反とありなり直此取とありなり
 万葉集はあゝとありなりとありなりとありなりとありなり
 あゝめく 日本紀は放逸とありなり拾遺集は此とありなりとありなり
 めたぬとありなり

びりともいふらぐらふし今寄字れきよとつて寓もるやう目已
あづかるといひも一回かあ及くなり

あつち 倭名抄は射塚をわじつちとあり編士はあつちと一持統天皇は
射野をあつちと云と案し一ひる事日本紀より云う埃囊抄は期とあり

あづ、 延喜或は束草所謂阿都加と云と云うらと云うあつちと云う
神代紀は青草束乃と云と云う草と能は敷

あつえ 持統紀は篤癡とあり熱困アツエの義あり又あつえびともよ
先り雄略紀は遺疾弥留と云ひひらつーれとも又あつえともよめは同

あづま 神代紀はあまともあり吾孀は後日本武尊は此事よめて景行
紀よ云一吾妻と云ふ川とよみ一事も日本紀よ云と云う○日本紀

よと云は碓日坂より云と云ふ也後より出東諸國と云ふみゆと云
ゆり吾妻郡よりて云流と云ふ川と云古事記は八お屋碓日坂は

ては事といひ日本紀略は廢相摸國足柄路開菅持途と云ふ事第一
りががみ坂かといふと云うはあづまといふと云うははつち

あつち 誂とあり日本紀はあつちと云とあり又誂とありはつちと云
あつちへ一説文は相呼誘也といふと云う今昔俗は事と云と云うは

あつち 日本紀は悶熱惋痛汗流と云と訓と云三代實録よ云り熱ヒ
ゆひ及んて熱と云俗は愛とありも暖氣也と云と云ふと云新撰

字鏡は眼ともあり○源氏物語は浮世と云と云うは字鏡物語よとて
あつちと云と云ふは浮世と云と云うは世事使用は攬字と譯と云と云俗は扱

あつち 神代紀は靈運當遷と云み顯宗紀は羸弱とあり熱癡ヒ
癡は危苦といふと云源氏と云と云うは熱と云と云

あづま 倭名抄は色鄙とあり東人此義とあづまといふと云東人
此勇健といふ事信よりと云古説は多く見と云う○續紀は是東人

あつち 神代紀は靈運當遷と云み顯宗紀は羸弱とあり熱癡ヒ
癡は危苦といふと云源氏と云と云うは熱と云と云

あづま 倭名抄は色鄙とあり東人此義とあづまといふと云東人
此勇健といふ事信よりと云古説は多く見と云う○續紀は是東人

あつち 神代紀は靈運當遷と云み顯宗紀は羸弱とあり熱癡ヒ
癡は危苦といふと云源氏と云と云うは熱と云と云

あづま 倭名抄は色鄙とあり東人此義とあづまといふと云東人
此勇健といふ事信よりと云古説は多く見と云う○續紀は是東人

常云く額ハ箭ハ立とも昔ハ箭ハ不立ともて君を二心と以て護物を万
系第ももつるあづまをたふむいひかつらるるをまていひみる儘さくさ
と稱きたまひとんころり

あづまや 倭名鈔ハ四阿とありはるるに方ハおろしと云所造は体
とつやとつり鏡目年銘も御四阿假殿と云ふは四阿方ハ壁ありて
つり屋州ハ局部屋四阿屋棧敷と云ふべしとつり馬場とあづまは
やとつり相爪屋れぬ又東屋れぬとて初め未だ此傳はつりとも
四阿ハ周礼左傳ホもころり逸周書はは宮廟四下曰阿と云ぬ○四阿
山ハ信濃高井郡あり日本武尊此相つり各ハ身橋此れ初らりとも
あづまは 倭名鈔ハはは氏物傳ハあづまをりともつり東屋は
ハ東ハ西土ハ對セハ河ハ一ハ流紫琴しむていひやらりし○はは氏
づまハ一ハも名も立ころりなるやうなれはは氏ハみぢひもまけんはつ
くさめもハ人ハぬはあづまをりともつりはは氏ハみぢひもまけんはつ
あづまは 倭名鈔ハはは氏物傳ハあづまをりともつり東屋は

倭名鈔ハはは氏物傳ハあづまをりともつり東屋は
とつり事つりハ一ハ古事記ハ詔琴ハ用り又吾妻此ハけはるるへく
ハ居此れは西土ハも又婦此ハ向此れ好合を琴瑟を調ふるハ和さへ
あづまは 東堅子とまり日本紀ハ東方價使者とあづまはとつり
るう如ハ三つ子此れとつり代ハ同名をよめる事古ハより此例ハはは氏
りらハ

△あて 古名伊勢物傳ハ高貴字とありあてやうと云ふはは氏ハ
物傳ハあてやう人らてやう男蜻蛉日記ハあてやうかくはは氏ハあて人あて
常知ハあてはは氏ハと云ふはは氏ハあてやうと云ふはは氏ハあて人あて
此一紙ハ上野也と云ふはは氏ハ○日本紀ハ質とあてとあり礪も同一
撰字鏡訓同一史ハ不足以當樞質と云ふはは氏ハ今もあてやうもあて
ともとつりあてはは氏ハと云ふはは氏ハと云ふはは氏ハと云ふはは氏ハ
といふ日れあてやう方ハあてやうと云ふはは氏ハと云ふはは氏ハと云ふはは氏ハ
いづつあてといふはは氏ハと云ふはは氏ハと云ふはは氏ハと云ふはは氏ハ

此は、まゝりころ洞と又擬字此まぢり○腹をのびりあてりり大諸礼り
足ゆ○多系集りりてさあがよの六抵當不^{サハ}定^{サハ}れあぢりへー○^シ認^シ成^シり
りてびとふ洞も貴ぶられあぢりへー

△あと 跡とよめり足處れあぢりへー靈異記に踏又躑とよみ新撰字鏡

よあぢりころとよみ神代紀に脚とよめり○^シ汲^シさ^シあ^シる^シハ^シ摺^シ一^シ月^シと^シと^シ

○日本紀に例とよめりもあぢりへーりふよりてハ依例れ謂と○阿堵ハ俗語

れ這箇といふぢりへー○世に三跡といふぢり小野道風藤原佐里藤原行成

なりころ書跡といふ○佛足石の奇とよみへーりてころと見也

あぢり 伎人れおまとの宗鏡録に如楞伽經偈云心為工伎兒意如和伎

者と見りころ今もあぢりといふ新撰字鏡に誼議と訓きり彼此之心

相知良とほきり拾ふ集り

さぢりといふ海りさそとあぢりてぢりあぢりといふ人ともあぢり

○小兒あぢり慮智あぢりて半とあぢりてあぢりといふも同ぢりあぢりへー一況

りらぢりぢりへーぢり^シ訛^シ也^シといひ又世にあぢりころ阿堵れあぢりといふり○

あぢり 日本紀に聘とよめり相問れあぢりへーし納采とらとらとよむも同

又^シ誘^シ字^シと^シも^シより^シ誂^シと^シ同^シ履仲紀に誂とらとよめり○新撰字鏡に誂と

あぢりとよめり

あぢり 神代紀に脚邊とよめりまぢりぢりへー○倭島抄に名及古姓跡部り

足將は獸れ跡とほきり者もて万系集に跡見といひた傳に迹人とよめり

あぢり 万系集にゆいといふぢりもあぢりといふぢりもあぢりといふぢり

り卒^シる^シといふ後^シ權^シれあぢりへーあぢり也又ともあぢりハ誘とあぢりへーとよめり

同ぢりあぢりあぢり○万系集にゆいといふぢりもあぢりといふぢりもあぢりといふぢり

り今もあぢりあぢりあぢりあぢりあぢりあぢりあぢりあぢりあぢりあぢりあぢり

あぢり 古今集にゆいといふぢりもあぢりといふぢりもあぢりといふぢり

とあぢりあぢりあぢりあぢりあぢりあぢりあぢりあぢりあぢりあぢりあぢり

文德實錄に後四位上和氣朝臣仲世奉公忠謹每至寢卧首向宮闕

禁秘御抄に白地^{アカシヤヒ}以神宮并内侍所方不為御跡とみり

おとさる湯あり万葉玉乃ちかしホたつみかけりも日一

△のに 兄とあるあやとつり又あわふももろとつり○豈れ字をむハ非然之
 辞ふれ物倍あせとつと東おれ人のあせとつり字書ハ詎豈也とももろとつり
 け語ハ二例りつりおれ物らんやとつり豈何それ多之神代紀ハ豈欲還故郷
 歎万葉集ハ豈不益歎與嶋守とつり詩周南注ハ豈當文王朝會征伐之
 時差里拘幽之日而作歎史伯夷傳ハ豈謂是耶李斯傳ハ豈少我哉とつり
 文選注ハ豈同謂豈不同也とつり終日卒紀の宣命ハ豈障事波不
 在止念天奈毛とつりつり倍倍れ何れとつりすよハ胡三省通鑑注
 ハ豈とどせとつりつりつり此まて推まから河とつり注ハ日卒紀此奇
 おももれハ朝鮮語とつり詩ハ豈弟より訓すつりあはし○庸ハ豈也と注せり

△のぬ 頭昭注ハ流業人のぬとあぬとつりつり

△のぬ 常ハ姉とつり神代紀ハ姉とあひとつりあり皇代紀ハ兄とつりつり
 ろも多りつりつり倍倍れ何れとつりつり○は列甲初ハてハ姉女ハとつりつり○
 つりつりつりつりつり

△のれ 色ハ地志ハ石垣を築く者とあれとつりつりつりつり里人あつり
 きつりつりつりつりつり○彼と倍とあれとつりつり○をハ阿野ハ義朝ハ字倍
 全成ハ居ハもつり石見ハもつり安濃郡なり○万葉集ハもつりかハ女ハもつりつり
 りのとつり延暦儀式帳ハ草葎安濃とつり伊勢ハ安濃郡とつりつり中ハもつり
 りハもつり安東郡安東郡とつりハ神代紀ハもつりつり安東郡安東郡
 似ハ文ハもつりつり兼久ハ東軍ハ安東忠家なりつりつり武備志ハ洞津
 とつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 何れハ津の城とつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 那那ハ人のつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 魚ハ草ハ陸ハつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 足ハいハ大塚村ハ大塚とつりつり車塚つりつり環り地つりつり見ハ○頼朝ハ此
 り河野冠者贈えつり起兵駿河とつりつり○あハ松原ハもつりつりつりつり
 第ハ河内行宮とつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 ころハいハつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

の意中其地最破却せりといふ事あり

いせはうといはれ、相承傳ともいひ一日終りてふこえは

此郡名野村と安法、不造、初めり儀式帳と安法、縣造真奈枝とんてい相

なり入し多字窓雲とて迎衛院に沙字安法、造兼道、真奈枝、此高といり

○桓武紀に授伊勢朝臣水通津連はらけはあへり○東鑑に實朝公は時朝

雅、伊勢入安法と造り岡負重、墨と破りといふ安法、初めり其墨をへ

りす

△のい 粟とあ淡し江をゆるぐ一字も訓も米れと此河をいふ故一穂と名く

又未といり木と稻黍稷れ色名なれとも稷と五穀之長といふ事あり

弘仁中は一莖十八穗此嘉木なり一事に記畧さるゆ○倭名沙は伊梁米といはれ

うらちとていふ事あり大あわり又後らりといふ事あり粟とんて林に霜れ

前と霜粟といふ○河波も粟れ兼てや安法、初めり古本記に東之流とて

河波れと初乃居たり一事に記畧さる事古語拾遺よりいふ○河はいふ

河と川の略語に愛之集流はるに河といふ事あり河はさくはゆふこと

とら又いふやともん、嗟嘆のこといり

あぐり 初れすといふ事ありとら翻梵語と菴婆羅者此云空といふ事あり新撰字

鏡と榭代りといふ事あり

あられ 日本紀に可憐といひ憐愛れといひいづれと嘆く事あり初めり

うらくいふ事ありとらいづれいふ事ありとてあへりともまみむめもといふ

らり○古語拾遺にのれらありとていふ事あり天晴れとていふ事あり

つとれといふ事あり適俗れ造り字と日神れ初語とていふ事あり常闇れ世と

なりしといふ事ありとらいづれいふ事ありとていふ事あり○あられとて社ハ伊

賀、必何賀、初市初村といひ風土記に淡合園社神樂神といふ事あり○あられと

山城、必相樂、初童子村といひ平重衛家此傍に寺あり

あさす 神代紀に并又配字といひ事ありとていふ事あり男女配偶とめらつとていふ事

神代紀に妻之とらつとていふ事あり○あられとていふ事あり

埃囊抄に擲字を用うといふ事あり勅力合戦れ兼ていふ事あり○薬又香とい

にのれ西土は合藥合香といふ事あり○書冊は樂合と稱せりといふ事あり

るるる冊子なりと云ふは河内なり

あまら 淡路に必し吾耻れぬやうに舊事紀より云ふ二言みはまぐ
とひして子をせしめたる初めあはれかふといふや人の禽獸は是れなり
耻と初て欲て殺すにせざるにまはれぬと阿波の海に海流れぬと云
と海に流るるなりと云ふは同一もいふ

あまらつ 延喜式儀式帳に於て畔放と云ふはせと云ふて田に水と無ら
をいふ

あまらや 倭名抄に亭とあり人やと云ふ又伊勢物語にわづらう板
敷といふもいふなり○今荒屋といふらばれやもいふ

あまらこ 日本紀倭名抄に贖と云ふは倭名抄に云ふも云ふ新撰字鏡にひ
ざがと云ふのいふことなり○同云針と云ふは訓せり鍔也と云ふ

あまらー 鎮火祭祀詞に吾と云ふはわづらうと云ふなりと云ふなり
乃後わづらうと云ふは荒と云ふなり

あまらや 俗語に胸骨と云ふは阿鍔羅訶迦れみ字に云ふと親するは据と云ふ

△あひ 相と云ふなりと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

相と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは
のあひといはれ畧あり○倭名抄に極撃と云ふは倭名抄にけわひといはれ
のあひといはれなりと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは
と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

あひび 今式等に相嘗と云ふはあひびと云ふは公事根原に云ふはと云ふは
よへ也中より云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは
間嘗れぬなりと云ふは相も同じぬなり又公事根原に云ふはと云ふはと云ふは
ぬらうりゆ秋令は季秋神嘗祭仲冬上卯相嘗祭下卯大嘗祭と云ふは式は
哉と云ふは七十一座其社に神主各自に官幣と受てある也後漢書に倭は
正祭外十月嘗稻等謂之間祀と云ふなり○九月神嘗祭と相嘗と云ふは
桓武紀に延暦九年九月奉伊勢大神之相嘗幣帛と云ふは中右記に相嘗
祭供當年新穀事也神命食新嘗祭同儀之故也と云ふは令義解に新嘗

謂嘗新穀以祭神祇也朝則諸神之相嘗祭夕則供新穀於至尊也との
あひどれ 凡そ神社は皆相殿なり儀式帳は同殿坐神祇相殿との神代
紀は復勅天兒屋根命太玉命惟爾二神亦同侍殿内善為防護と云ふ
西土れ書は神仇との也

あひたひ 相生れぬと相おひれ小垣此小松原と云ふあり○相生れ松武
尾も原那ふ中村より雌松雄松とも高さ七間餘也

あひたひ 古今此序は多妙伝言は相おひのやうに相おへとの相
おれぬと云ふ

あひぎく 万葉集は妹背れりより兄弟朋友れみぢひとから奇とに我
との妙と相問と記しより字は文選曹子建與吳季業書は是ゆ古今集は
里立其部をまき妹背のなごひのよと云ふ兄弟朋友れ奇難妙と云ふ

あひあふ 相おれぬ軍中より西はと暗号と云ふ日本まは天武天皇
乃軍より云ふより太平記は相討れ付向り武と云ふと約束れ若かり
と云ふと云ふ是○返答も云ふらひといふも同と云ふ

あひたけび 日本紀は共食者と訓や相^{カケ}宴人れ義あり宴と云ふけ
よめり今相伴といひり對付れさき

△あふ 隔てるおれあふるは會も合も逢も相も間も比もなへりあふとも
いふは寸五分○守此歌はあふてあふる意といふは遇て後も不逢といふ
又逢著して合文と云ふは又詩は相逢相値且銜之益といふ人おきては付

り當ちといふなり○續古今集はなごめらあふれ松原と云ふるは女武部
なりといひ○饗を日本紀はあふと云ふは遇待乃と云ふ○倭名抄は
壑を訓もも饗より云ふなり○源氏物語はあふよりみよりと云ふは奥に

楷せる復りや○職人袂合は小力より云ふは河原り今も判切なりと云ふ
あふともいひともいひ○勅力と云ふはあふと云ふはあふともいひ○會別は
始は諺は文集は合者離之始とみゆ三集

あふぎ 扇といふあふと云ふはあふと云ふはあふともいひ○西生は扇と云
はあふともいひは班姫扇はあふと云ふはあふともいひ倭履ともいひは園麻布り

今此解の八日年より遠りせり通雅は摺扇起于東燕而盛于今日といふ
 是なり今舶來此摺扇象牙を紙に貼りては此の如くも有り遵生八牋は象
 牙桃枝扇云々通鑑南齊北下胡注は腰扇今摺疊扇也佩於腰間故曰
 腰扇といふ○埃囊抄は蝙蝠の翼を紙に貼りて扇をかくりといふ
 ことり宋史渤海國傳は端拱二年貢蝙蝠扇二枚と云々雄尾扇鵲翅扇
 此と云り○續日本紀は渤海國王は楸柳扇十枚を賜ふと云々蒲葵扇
 云々一方方言東人多以蒲為之嶺南以蒲葵為之といふ今も琉球より本
 來り○倭扇は檜扇初めはくし目と仰ぐ此訓意はなるに似ては訓は城
 殿扇といふゆ事造は後三條院儉約を事と云々し御所は骨檜をて葉
 とて持てぬるやと云々遊官紀聞は宣和中高麗貢松扇三合といふ
 是なりや宋鄧椿は畫繼は倭扇以松板而指許砌疊亦如摺疊扇者其柄
 以銅釐錢環子黃絲線甚精微板上畫山川人物松竹花草亦可喜と云
 々○續日本紀は以年老力衰優詔特聽宮中持扇策杖と云々○
 枕蓆紙はなまめりてはみかき○これあつてははらまうらつてなりて

とてかくるはけは河海は檜扇は東方は上三すつて流るふそつてみて多
 かるてとてあまびいむと云々も同じ風情と云々
 守覚法親王右記は冬用扇事似有禮法但冬用檜扇暖暑之頃用蝙蝠事
 尤宜之又按冬扇而用蝙蝠之人可有之携蹴鞠之藝堂遊と云々○杉
 目扇又あまめと名くは女の扇にて縉紳家幼弱は附をてと云々○三十
 九枚をとりて胡粉地にりて彩色す其柄もこれとて楮松梅など勝
 花を貼る○小の物は四月朔日近衛兵衛四府進御扇事と云々○
 五節はすも扇といふものも有りすは透く○今も有りといふ末廣有り
 下合上開くもの成は本式は骨七行也糊をて紙を貼り中啓は柄
 十二本骨有り是は公卿以上は妻紅也よる復は蝙蝠と持冬は檜扇を
 持とも有り束帶色目は束帶は附甚は檜扇を柄衣冠直衣もこれ極
 熱は鳩扇乃扇も子細ありとも有り中山派は折腰扇と云々○扇は
 是といふは女房かきは法は扇をかててふも有り或は捨扇をてすと定
 ひるは及ま名月も是と云々すはてはねあふも男子は扇の下は女子は

泥銅扇をもちのぶき譯す○平家舟づつ日丸此扇をゆつる故實と
減り那須與一、射よりハ藝さる事あつる日丸向ひらと入る事ハ
義経の終つてせむもあはまきとつり○扇流ハ源氏繪より○此
扇のつた城殿まで送りあつり○あつめ送りとあつり玄旨此東國陣道記
附とゆつてつり扇の箱根山日丸とすもあつりあつめ

○扇此宮ハ焼杉を用らハ山事ハ喪中此後物とつり記録とあつり初と
と薄様ことと○扇の芝ハ宇治の平等院より於み自刃此場ハ於み
ち事と企るや私憤とあつり大義とあつりあつりあつりあつりあつり
事とあつりあつり忠告とあつりあつりあつりあつりあつり

あつり 泥とあつり左右相踏此後ハ桃華葉葉ハ鍍ハ壺舌長半古とあつり
○武藏のあつり伊勢物此後ハあつりあつりあつりあつりあつりあつり
六とあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつり○今作とあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
○花肆とあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

あつり 倭名抄ハ障泥とあつり熊皮ハ五位已上此著るあつりあつり
よと驅るとあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
りあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
とあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

あつり 倭名抄ハ杖とあつり杖名ハ杖とあつり新撰字鏡ハ杖とあつり
らげ杖とあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
杖とあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
竹杖とあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
みらとあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

あつり 葵とあつり倭名抄ハ葵とあつり葵傾葉向日とあつり仰く日此後
新撰字鏡ハ葵とあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

経の系や日本紀にもあるとあり源氏物語にもあるとあり
そとふるはとりあふまがらうも不溢也とあり新撰字鏡に潜とみるにふ
ふとあり溢也とあり

あざわく 倭名録に澤とあり釋名は人髮恒枯悴以此令濡澤と俗
に脂綿二字を用うとあり○今物語に油綿とあり○寒夜に節會あつた
下子に油を綿とひく一面及手などに塗らるるとあり

あざすり 倭名録に兼鎧肉とあり○武士に騎馬出立といふも泥障
を履かず但あざすりなる若くわすといふもの泥障も毛皮をひ
鎧磨と播磨革にまがねをひく註いあざの鎧磨といひ今板泥
障といふれにやとあり○地名に鎧磨といふ所ありと無倉といふ古
に此濱より杜戸といふ所あり

あざささき 文選に左右とよみ和語事類には本とあり又縦横といふと
とより八雲抄にささきもかくすもれとありと宣う又いふはささき酒か
あなりともあり

あざさく 伊勢物語にささきさく真字は随分れ字と填う源氏にらふ
なけはれさまへはともあふ事やわさひゆんともいふ急いやくをわ
ささきとありささきもいふ可もあらひいふよりいふは似合ぬあれ
なぞれ字かひてすゆり也ともいふ人と思ひてある事とれとあり
なぞい一委いふかのささきとあり

あへ 日本紀に饗とあり又わやともいふれは遇待れとあり○今合れわ
りハせ及へ也○伊賀に那名阿拜と和名也といふと記せり倭姫世記
敢と名の讚岐れに名多配をさへともありわい

あへ 敢をよめりたへともいふりさかかずと譯す進爲也と源より敢告天
地之神なりといふ物もさかかろむれとて不敢のへて何れともいふ
敢不ひく何れぞらんやとよむの例に又肯さるりぬれもさことあり
可也と注せり

あへず 倭名類聚に不敵といふ不敵といふ不果といふ不果といふあつたとい
なりよそ方集集は不勝といふりさか縦將堪といふぬいりんとあり源氏

物此をるき事より河海は無敢此をとり
あへりし 海氏物語より 饗れをくらふ初てらふ及て今所らふも
あへりし 海氏物語より 饗れをくらふ初てらふ及て今所らふも

あへりし 海氏物語より 饗れをくらふ初てらふ及て今所らふも
あへりし 海氏物語より 饗れをくらふ初てらふ及て今所らふも

あへりし 海氏物語より 饗れをくらふ初てらふ及て今所らふも
あへりし 海氏物語より 饗れをくらふ初てらふ及て今所らふも

あへりし 海氏物語より 饗れをくらふ初てらふ及て今所らふも
あへりし 海氏物語より 饗れをくらふ初てらふ及て今所らふも

龍戸なるは是く日本紀より白水郎と云ふは白水のほと 地名即ち漁郎也
崑崙奴乃其を中より沈むる代醉編より云々 ○南海記より 蜃蜃以舟為
室 蜃有三一為魚 蜃善舉網 蜃論二為蜃 蜃善波海取螺 三為木 蜃善伐材
本より云々 ○尼のつを釋日本紀より 梵語也と云々 名義集より 阿摩此云女
母より云々 日本紀より 阿尼と云々 阿尼も漢語也 一説より 阿媽と云々 三
藏法数より 梵語 尼華言女と云々 ○尼の位の名より 漢日本紀より 法
均より 進守大夫の尼位を授る是也 ○尼將軍と云々 八賴朝は室のふと 招下
禪尼と稱せし 小條時頼の母 安達氏也 ○文治の頃 京壬生は 尼は 尼は 尼は
と云々 乃より 大なり 胸を食らるる 忽ち火を乞ひて 慈身を 燒けさせし
宣徳の日記より 又正元元年より 一系壬生は 小尼より 死人を 食ふ事
百練抄より 文和二年より 京師 尼より 連りし 小兒を 害する事 數十人ありし
園大曆より 又三河より 小みと云々 里より 此ら 尼より 或は 靈異と云々 崇仰し
或は 奇怪と云々 伝文 せと云々 鬼と云々 負 志 此 女子 廿歳の 以舟より 奉ふ
注 船を 病て 故月を 累 神と云々 種 行 住 平人より 終り 終り 終り

一滴を吞らざるは近辛の作事ありて方まかりぬ死後送葬せざる事
三日あてもも変態をせん奇疾といふべし

あまふ 作のあり新撰字鏡は餃をもあり天足のそめと友まをる所天
の常道也○口語はわたり此のころをわたりふといふをわたりしつめし
古今集

いふいりかへりやえさ八十とせたりまう久しき君の沙汰をせ

あまふ 真字伊勢物語は多きをなが霊異記は数とよみ万葉集は数多とよ
せり餘半は和日事記は数十里は和日事記は数多とよみあり○伊勢物語は
あろよの神河内り天津社乃ちつやまたあり

あまふ 神代紀は如をあり古事記は本華之阿摩比能微坐とんころり
おちの寛平熟田縁起は日事武の随道水時年三十仍号其瀨日能知
瀨能知者命終之詞也といふをよ

あまふ 霊異記は甜乃甘をあり味の作事あり俗にたまふ俗にたまふ
いといふ甘のよをせむるをよへ○俗に髪のおの兒をといふ又器物の

蓋あふ緊密なりとらるるをいふと淮南子は大徐則甘而不固とんころり
又らまの事といふとんころり詩経は盜言甚甘とんころり○雨師もあり大
和吉野郡丹生川上神社と三代文徳天皇御末は丹生川上雨師社といふ
雨師の字東都賦はるゆ新葉集は芳野のゆ文と雨師乃社へ止雨は奉
幣使をといふはるゆ後醍醐天皇

い里ら丹生川といふはるゆとんころり

あまふ ちりれ零れりて曇るをいふを雲霞ともいふ一カ葉集より
ちりしりるるをいふはるゆとんころりて天霧相とよりあはらと○西
行談抄は人丸の秋

梅れをそれともいふをいふはるゆとんころり

いすハヤのくはすのたまらるるをいふはるゆとんころりすちあふ奇
と八尾をいふはるゆとんころり

あまふ 虚空はひびきありとらるる顯昭はひびきありとらるるあまふは
高祖のちるるあり○倭名鈔は馬陸を訓せり今いふはるゆとんころり新撰字

鏡は蝸を訓せり初言也○松葉串はつまびき花梅もさう

つまびき 雲さあけり雨乞は西土も請雨とてつまびきを訓せり

東見記よりさうつまびきも同し○祈雨は雨の神は黒馬をとり祈晴の

時は白馬をさす小山抄より祈晴は丹生貴布祢被奉赤馬と見えたり

其長々

神垣は引物毛のとも見せて毎言にみり丹生は川上

つまびき 春雨鉄は天兒をとり源氏常世の物語をみたり實は日勝

乃と鈿女命よりみり列仙傳より東王公は模様より天児と

よりみりやまわり東王公亦曰東王父仙傳拾遺よりゆつ流は東堅子を撰

すもみり○城砦をて造るはを女此面を造る有と胸は竹筒をめて固う

護身符と入るは源氏の抄より常世を是と用ひて法の凶事を是を負すと

あり尼兒ともみり今世は這兒もはま也といり○松原の洗膳はつまびき

とすうゆり日中抄みりさうゆは青はあまがりのはつるはつるをさるへ

あまを記 喜撰式は若詠高峯時あまをさるとつるをさると同式のを奇はつる

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまを記

あまのこへ 刺とらるる修ら副の事と云う後撰事月日ゆらまらまら
りりてひびき年いあもまらり一先生の後には割にあまのこまらまら
まの事あまのこまら倭語と鮮せまら此張あり

あまのこへ 天照とらるる万葉集も安麻泥良須可未とらるるを延て
らすとらるるまらまらまらまらまら○三代実録は基経公を太政大臣は
まら宣命は朕は食國を平けく安く天照一治め國一まらまら天
皇はまら知しあまを准てまらまら

あまのこへ 惠の枕詞まら日牟紀は天疎まら万葉集は天離もか
まら天らられまらあまのこへ帝都まらまらまらまら

あまのこへ 神代紀まらまら天探女此事とかくまらまらまら西
金剛のぬまへまら小悪鬼を纏り身まら梅村裁筆まらぬまら天は邪鬼
此物まら語まらまら昆沙門あまのこへ陀羅尼集は昆沙門天像令身被
金甲而足踏女人之肩或云乃其母也まらまらまら

あまのこへ 天少女の事天女とまらまら又天はまらまらまら續後拾遺集あり

君の世り天は成とあまのこへまらまらまらまらまら

梵書のご事也或ハ女宿と云まらまら○万葉集は海童女もまら海
人れまらまら漢童女もまらぬ

あまのこへ 神代紀は天羽矢まらみゆ篁を割て全羽二枚まら入てまらまら
まら四羽まらまらまら天羽まらまらまらまら其疾速と稱まらまら
あまのこへ 三葉りり古事記事代主命の天逆年まらまら蒼樂離は原

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
逆年を用まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
逆年とまらまらまらまらまら海人まらまらまら

あまのこへ 神代紀は寶祿又天業まらまらまらまらまらまらまら
あまのこへ 神代紀は寶祿又天業まらまらまらまらまらまらまら
あまのこへ 神代紀は寶祿又天業まらまらまらまらまらまらまら

あまのこへ 神代紀は寶祿又天業まらまらまらまらまらまらまら
あまのこへ 神代紀は寶祿又天業まらまらまらまらまらまらまら
あまのこへ 神代紀は寶祿又天業まらまらまらまらまらまらまら

あまのこへ 神代紀は寶祿又天業まらまらまらまらまらまらまら
あまのこへ 神代紀は寶祿又天業まらまらまらまらまらまらまら
あまのこへ 神代紀は寶祿又天業まらまらまらまらまらまらまら

世とては老民とては若き海りて天はひつと事をかきし
のまのまの 日本紀云天狗とあり星は名を其疾如風其聲如雷震動
可畏なりし法書云んところさきハカハカハカ怪よりて狐と訓まふハ

○東鑑云天狗靈託事源氏にてんぐだまをいづハ艦艦此形とて或ハ老
鷲化とて老とていふ邦に古事記多しとれもま星は名をいづる本
居訓まうて天狐ともゆふと又狐云天狐地狐人狐の別なりて今ハ天
狐とあり天狐ともいひ四言類函は狐千歳與天通為天狐とて何台記ハ
天公ともいふところ多獸とて天狗此名なりとハカハカと獸ハまみハ杜子美
天狗賦云上揚雲旛兮下列猛獸とてハ三秦記云有天狗来下有賊則
天狗吠而護之といふ若くハ又五朝小説云我ハ飛天夜又といふ地塔
上より降りて婦人と秘ハ形鳥鴉と似たりと又廣西通志云一人釣るる
長二丈面洞と三尺餘長とてハ信守披髮鳥喙背ハ二翼ありといふ若
俗云ハ不よく食りて人夷語と絶すとてハい邦よりや渡りてん
又出明録云王燒病死自朝至暮復甦云見一老嫗挾將飛去見北斗君有

狗如獅子大深目伏井欄中云此天公狗也と天公の字とハ据も又を川
掛川の近邑西方村龍雲寺ハ小僧ハ福天とて天狗なりとつりての言を勸
請一祠ハ社とてハ永くいふ此守護社とてんとて禪寺をいふ多ハ此和
尚吟味ありしと數百年來此事とて信一奇異さくつりしとて寺本
此とて言ふと一社と創造ハ福天権次と号す又つげとて去申より鈴と
松とて驛路の傍とてハ○元享釈書云仲算ハ童兒の事とてハ潛入ハ山
誦經不食月餘已而得羽服成神仙とて釋陽勝仙とて後吉野山と息
真とて遇て我身中无血肉遍体生奇毛といふ身生西翼飛遊空中とてハ楚辭
注ハ或人得道身生羽毛とてハ

のまのまの 中臣被詞云天津宮事とてハ祭事とてハ一の言本より
官事とてハ是とすハ天神より傳へ本とてハ務なりとてハ天津宮事
とて稱せらるなりとて共ハ例ありハ宣事誤るハ神代紀云使天兒屋
命掌其解除之太諱辭而宣之とてハ

のまのまの 日本紀云天磐船とてハ風雅集云磐船を久

久方れ天の星船漕よせし林代乃浦や今たらしむ野

是ハ鏡速日命此故事之ゆゑに社も推測之へし○セタよふふ事新ふ我集
又々○波後磐船郡ハ磐の形舟なりなり式ハ磐船神社なり

はまはらまづり 林代記云天吉葛とあり一友と葛とほめてはるも砲の
事なりともしり

のまげのかみ 琉球國の豊見城玉城といふ西山ハ海神と云ふなり其神名くらま
ら海づくハ祇まてまし神れまぬへし琉球王祈雨れけはるめり奇
かくてまも民れまぬれぬりとあれまるともやあまつは神

此海く大雨傍陀よりとも琉球の塩平親雲上明和年間土尤の大嶋ハ漂著
せし附の活ハ豊見城玉城ハ豊玉彦次ありありと古事記と吾堂水と
りまハ祈雨の感應宜まらけ

のまはまてがと 海人の左右手形ありし左右のまをひらげて海に潜く鳥とい
ありやま竹煙瀉れまともなり竹煙といふ貝海く砂の中に入るとまを
たハ朝の門より跡の砂と鏝とて一へらかへる穴なりま穴は地を入るとま

破よまほりあをまてくしつみ物とてまをりれをんごまはるるど深く掘
てま再びむごまの目とまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをり
あまひまの蟹れまてくしつみ物とてまをりれをんごまはるるど深く掘

のまはまてかと 後撰れ奇まてかとまをりかとお尻なり形昭ハははるるど深く掘
焼海人のまかかともりまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをり
奇とまをり潮と時瀉れまて

のまはまてくまと 海人れ縄たごりれまをりまをりまをりまをりまをりまをり
あまはらまづり

のまはたごあま 海人の榜繩ハ網ハはあまら大縄なりといふ林代記よ
千尋榜繩とてて榜ハ本名をたはと剥て縄とすくまをりまをりまをりまをり
△のみ 網ハ荒目のまかへし塘網ハ引めたり撒網ハちりま又扇網なり

又擲網なり浮網ハ小づりと称す○網まて淵あまをりまをりまをりまをりまをり
而羨魚不如退而結網とてまをり○車ハ置とてあり魚ハ罟といふ獸ハ罟と
いふのれも又同一○まをりまをり留鳥とてあり義訓ヤかり○網れ目り

凡さうすといふ物ハ散本集

にせりんとこのめしとらみのめふさうらぬ風の心やうらり

らみれめといふ草なり四十葉といふ○もたぬといふ古なり

みあつたあみのさうひれもあく人とまわれうそふさうら

○蟹蝦といふ海虫はさうらるる及らむし及び倭名鈔ハ海糠魚といふ

すあみこといふ物といふ新撰字鏡ハ巖字といふハ心ゆかす○

網の浦万葉集ハゆげ波國といふと心ゆかすハ倭名鈔式ハ波ゆか

網ナ和名鈔ハ鵜足那津野といふる浦なりといふ

△あじ 蛇と日本記の奇なりといふ○編々細といふ物なり

あじせふ 日本記ハ洗といふる湯らみるといふ是なり中山傳信録ハ洗

浴といふと譯なり

△あめ 天といふ神代記ハ天といふはゆ神名は首より天字ハ多くあめ

といふり古事記ハあめといふハ註セどあめと唱ふへハ註ありされハあめハ本

語のまは抄信なりといふ又訓天如天といふハ天のといふなりといふ

とといふ神代口訣ハ開くをといふ自然ハ強てを求めたり○

禁河の老ハ九宮といふと訓を九天のハ黄帝九宮經なり○雨ハ天水

なりといふる河といふ事ハ天流也といふなり流ハ天水と音なり

ゆ○大洋海ハあつたすといふ利未亜洲の東北隅入多といふ

千萬年无雨亦無雲氣といふ○倭名鈔ハ鯨をいふる時ハ多く

おといふ今あめといふと呼ぶ或ハ嘉魚といふ湖也多○鉛錫

といふハ甘きといふ錫といふあめといふは水といふ新撰字鏡ハ鐵

といふハ斛麥なり錫といふはといふ鉛をいふるといふ俗語ハ漢

書ハ含錫弄兒孫といふ大言術義ハ暗以甘言而陰陷之といふ

といふ○あめうりれといふ古く西土より傳はるといふ詩箋ハ蕭編

小竹管如今賣錫者所吹也といふといふ三官鉛も西土の商人三官

据さう菊川鉛もといふ○丹鉛録ハ以鉛浴釜といふなり○豆汁を

俗といふといふ錫といふといふといふといふといふ○綿筒を

伊勢に傳るゝのわとつ係巻と云り ともく示すゝあまのこゝろと云り
○海多石石と云るはともく食之(一)陪書は日本國王姓阿每と云
るは天の孫と近世韓人阿每と稱すといふに据とる

わめけりては 大敷綴れ祝詞は天の血と云ふ前漢の志は倭人祿功
臣倭天雨血漢哀建平年山陽湖陵雨血三日と云々又漢惠帝時晋惠帝時
と通鑿と云と云り 一説は姑獲鳥の所為也と云り

わめけみりては 神代紀は天柱と云ふは天の表を云ふは自なり
○神名式大和國平群郡龍田坐天榭柱國御柱神社に祝詞は天乃御柱
乃命國乃御柱乃命と云り神代紀は化整天柱又以天柱奉於天上也又碓
飯廬嶋為國中柱又分巡國柱同會一面と云ふは神代紀に云ふ

△わくと 兒女子の語は餅と云ふ甘き物也○北虜は倭は若と云ふ
と云と云り

わたり 一万葉集は天降此字を云ふありわまりは多と云ふ也○わたり
はく云はわたりと云りけりては六風云記は天上有山分而墮地一片為伊豫

國之天山一片為大和國之香山と云り倭名抄伊豫必久米郡天山松
山此名と云ふは勝山といひ一夫と並へり式大和國十市郡天香山
坐櫛真命神社山の少乃藤原まゝ海を大和ハ四方にめぐる云々申ハ
平らなり香山耳成山歟山各獨り立て足の如くやう藤原此云云者
山よりたりて耳成山火の云々香山此と云と稱するはなりぬくや
○琉球云はるは船なり船は靴肚中と調とる時と云々云々は神代紀に
同義あり

△わや 嗟嘆此語わやと同一神代紀は吾屋檀城根尊なり口訣は畏
れ古語ありと云り西土より阿呀といふも是と云り万葉集は綾尔良伎と
いふも神代紀に云く○文と云ふも嗟嘆のまや韻瑞は日月天之文也山川
地之文也言語人之文也と云ゆ○後の文は云々といふは新抄に
百段や大内云は丑寅なりけりへの司のやなてすつ云

又朝野群載は一窠綾二窠綾七窠綾又く和名抄は綾有熟線綾長連綾
二足綾花文綾平綾等名と云々小文破菱綾永正記は云々わやかゝわやん

より延喜強正式は凡後ハみ後ハ上レ朝服ハ用ラるルとゆク事ハ後ハ下レ
服用ヲ得ルと云々あり今武家ハ制モ是ニ據ルといレ由蜀江錦吳郡綾と
云々○機具ハ下ヤといハ物アリ経レ糸ヲ下ヤと云々古ハ綜と云ハ糸ノ
ことヲ玉篇ニ機緯持糸交者也と云々○綾弓ハ崇徳院讚岐播遷レ時
阿野郡廳弥大夫高遠ノ家ニ由リて其女ヲ幸一名ケララ二皇子ト云レテ是
林弥太郎殿ト稱ス

あやー 奇字異字とありらやと嘆息家切人ーのやーはあがやとあり
やーはあくともしう○神代紀ハ神もあや

あやと うつや物結よおのがたぶさちりと云ーらやーと云レ由ゆらゆらと同一や
す反ゆと云古事談ハ血あゆと云々

あやめ おのあやめと云レ文理ハ多クさぬは後ハ世ハらわハ錦花ハあや
と云レぬのかハ見れかすて文多クものハ少ーあみめとぬめぬれめと云レ
ゆらゆーれええわおと云レと云レゆらゆらと云レと云レゆらゆらと云レ
す多ク菅蒲よと云レ○淫女と云レハ淫らハ事ハ女ヤラあやと云レ

あー万葉集ハミナハ淫女と云レてぬらと云レと云レ○菅蒲ハ貞觀
儀式ハ漢女草と云レと云レハ表青裏紅梅と云レ○
五月五日れあやめと云レハ慈谿縣志ハ端午懸菅蒲艾虎如楚俗と云レ
○あやめれかづハ續日本紀ハ昔者五日之節常用菅蒲為縵と云レ○
あやめのうハ雲圖抄ハ足ゆみ乃日菅蒲と移レ抄中ハと云レと云レ
頭胎と云レ又あやめ車と云レと云レ六衛府より敏と云レと云レ
かひてハんやと云レ○西宮記ハ五月菅蒲机四脚と云レ○あやめれ松
東鑑ハ足ゆ鏤金銀と云レ抄中ハと云レ○菅
蒲れ根と云レと云レと云レと云レと云レ西上ハ艾虎の
かー○駒のよと云レぬあやめと云レ拾遺集ハ下と云レ○あやめハ漢蘇也
と云レ今俗と云レと云レと云レと云レと云レ菅蒲と云レと云レ
めと菅蒲と云レと云レ○砂石集ハ故鎌倉右大臣家抄ハ菅蒲と云レ
と云レ及人ありと云レと云レと云レと云レ菅蒲と云レと云レ
と云レと云レと云レと云レと云レと云レ菅蒲と云レと云レ

このうり事とせり砂石集に無住法師の姓少く三郎兵衛尉の其兄景茂の
世よい事と流るぬえと射一堂に宮女高浦にふと湯のり一とて湯あり
しり浮豆加茂郡河内山の業といひいらあいふに尾よさうて後まといひ
と據りし大著聞の河内山を仲綱の尻知るもといふ

わやう 万を夢りわやう悲しきわやう一とてさうらわ文は夢
えといふく嘆くつと事まるとつとわやういよも同夢も多し一後字
う泥める泥いのか

わやう 唐哀記にわらわくわたり新撰字鏡に喧字とあり杜詩は生憎
柳紫白於綿遊仙窟に可憎病鶻夜半驚人の生憎可憎とわやくとわ
しくともわたり新拾巻あり

わやう 後日本紀に挑文師とあり後には挑取とありの今わたり
ひま花本ともいふり明律は機戸及桃花挽花工匠とあり○古本に文
選に機とあり右はわたりわたり今わたりわたりわたりわたり

涅槃經の幻主機関木人なり又弄丸の影を伴はらわたりといふ
後述れあたりわたり
わやう 肖借れあたり靈體れ字とあり心づる一伴はらわたりといふ
この拾巻あり

わやう 舟は事實明白ありとわたりわたりわたりわたりわたり
○船辨慶れ話といふわたりわたりわたりわたりわたりわたりわたり
いふ魚うつけい必も覆すといふ小判鮫の事といふ頭は小判金れわたり
魚なり油奥萬國圖といふ咽機那魚といふ咽機那の虫語なり一或ハ
博山魚といふ貝原氏の書うふあといふ魚いといふ魚い(舟)乗れわ
わやう 伴は人たりわやう又わやうわたりわたりわたりわたりわたり
めを及むと綾と禍とをせし事治代記にわたりわたりわたり禍れとわたり
郵程にわたり

白を染る染るも人のこころも染るるたふひかめわたりわたり

浄裳濯川袂合う

あやめつゝ人たるてしむいかんんふむひつづべき袂なる福を

あやまら局 謬誤とよめりまるむじしよとををう新撰字鏡より謬とらやま
はとよめり

あやまら 過字愆字とよめりまら及びあやまらとををう新撰字鏡より誤も
新撰字鏡より註も註もよめり○犯過の罪ハ知て為の悪と犯といひ不覺して
為此罪と過といふ律れ法し

△あゆ 年魚といふ日本紀より鱈魚ともいふ愛とへ魚あはれ名つ
らうりや尾張愛智郡相模愛甲郡と皆あゆともあり南産志より鱈
こととら○年魚の泥鰌トシヤウと化せしと親しく人なり○俗は鮎とあひハ
和名鮎トシヤウと多く鮎トシヤウあまづあれとも神功皇后は年魚とてとををう
りよぬふらうといふ○いまも長せう付は細と張て杓とを汲と汲鮎と名く
あゆとらゆは春とさびらゆはあゆは林と三層は海より出らゆといひ列
物と○こがゆはゆは結とらやとにせとちひとををう○延喜式より火乾年魚

煮乾年魚押年魚トシヤウといふ白干鮎類聚雜要より火乾年魚は煮乾鮎ともい
押ハ鮎押といふ○あやまら鮎はゆと痛とともめら鮎といひむらり

あゆ家 万葉集橘の奇よりあゆといふあゆといふとありあゆといふとあり
いり柳葉紙よりあゆといふあゆといふあゆといふあゆといふあゆといふあゆ
出字とよめり又金葉集よりあゆといふあゆといふあゆといふあゆといふあゆ
ともいり馬代也侍よりあゆといふあゆといふあゆといふあゆといふあゆといふ

あゆぐ ゆぐあこととらゆのまこととらゆは下よりゆ拾まきま星はゆぐ
とらみ又ゆぐとよめりかともあゆと十哉集り
あゆひかきゆぐれゆてゆぐらゆぐらゆぐらゆぐらゆぐらゆぐらゆぐらゆぐ

あゆひ 日本紀より脚帶とらみ又ゆひといふゆひといふゆひといふゆひといふゆひ
西宮抄より足纏とらみといふゆひといふゆひといふゆひといふゆひといふゆひ
ひの小鈴といふゆひといふゆひといふゆひといふゆひといふゆひといふゆひ
足と纏ひ糸糸約して長大とらみとらみとらみとらみとらみとらみとらみとらみ

わらうご 日本紀又蘭をよみ和名抄又蘭蒿をよめり荒に葱はよみて蘭葱をよめり六膳式又蘭幾把とせしは是なり又山蘭といふは此也といふ推馬樂よよふれといふ是なり○新撰字鏡又蘇を蘇阿といふと云えり○倭名抄又辛夷をよめりさとし訓せり其香をよめり今日本襲よめり○齋宮は是の塔をよめりさとし阿蘭若此といふと葱臺は負九輪れりといふは是なり塔のたつといふは是なり蘭葱よりつるは是なり○東やひんが蘭やわらうは此の俗名なり○舞いりる福と西土をよめり蘭と東門といふ事あり東東相をよめり○舞いりるきとつる倭名抄道調曲又唐人三臺といふ是なり○醉郷日月三臺曲ハ唐の則天作るといふ事あり○信列本曾よめり村あり辛夷此也なり伊勢は南方柚の木は此なり神木といふ六伽羅本あり○わらうごみ 靈異記又炭とあり又炭を列せり今鳥石といふ晋豫讓の舌て啞しるを此也○延喜式又荒炭和炭なり是ハ今ハ堅炭焼炭なり○新撰字鏡又差をよめり此はともあり炭をよめり

わらうごめ 江は荒と荒磯といふ一入海の荒をよめり日本紀又桃津布といふ多集り桃花福とせしは後ら多つつけり是之延喜式又退紅といふあり靈異記又紅欄は裳今之桃花裳也といふわらうごめ 日本紀又豫字といふありさく始め此をハ反々也まかといふ譯す豫ハ素定也と註せり預も同し逆といふは先事預度之也と注す宿とむむハ風とむす早也といふわらうごみかき 日本紀又明神といふあり續日本紀又現御神とあり神賀詞より明御神といふ万葉集より明津神吾皇といふありさく宣命は視神止大八洲國所知須といふわらうごみたま 神功紀又荒魂和魂といふ其さかをさくといふなり紫雲風を紀も大神之和魂者諱而荒魂者皆悉依給といふなり○内多倭式帳より荒祭宮蘇太神荒魂宮といふわらうごり 踏歌といふ持統紀といふ宣命譜よりいふさくといふと公事根源よりいふ男踏歌ハ正月十四日女踏歌ハ十六日ハ聖武紀より

西上此書、荀頭といふ筈此はのぼりあるふ方よりさう合はるるり
透るちねといふり何氏兵録、鉄砲此あり此はを鐵馬蹄筈と
いふ也といふり

ありかゝし 日本紀、毘毘とあり又わがかともいふり假名本、
織氈と書りあてをみる例あり

ありかゝぬ 古事記萬葉集、いづ神神抄、織綯といふり新衣、よ
しり又万葉集、珠衣といふりよみてなり、ぬれ寶といふ、けり、珠を
かさねば衣をいふといふり、珠衣といふ、あるはなす

ありたしゆ 萬葉集十六夜、下八夜、己はひの月、入るるあり
いふなり、或は晨明といふり

ありかゝす 日本紀、消息又狀字、文選、景跡遊仙窟、行跡、東澤、形勢
け奇採菊東籬下、悠然見南山、此風味、いふり○ふの池、伊勢、
多氣郡、齋宮村、あり、ふの池、穴、佐佐木、安曇郡、又對馬、あり、いふり、朝鮮
といふりといふり、富山、瀨、至る四十八里といふり

ありかゝぬ 日本紀、消息又狀字、文選、景跡遊仙窟、行跡、東澤、形勢
といふり、下学集、台野、いふり、ねれ、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、
列宿分、其野、いふり

ありかゝぬ 和泉此宮、坂西、いふり、松葉紙、いふり、事、いふり、
いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、
塗脂、於線、使、蟻、通、馬、と、襍、寶、經、いふり、いふり、いふり、いふり、
いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、

ありかゝぬ 有無、日、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、
大鏡、故事、後、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、
大葉、山、葉、此、二、種、あり

ありかゝぬ 有無、日、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、
いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、
いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、いふり、

ありあれがえ 朝鮮北鴨綠江をりりハ鴨綠の音あれハ江れも川れ韓語ニ
かりきそ川の和漢を加へりありといひ和泉式ア
りそりー君を言ひんものやれりよれ川の石らつゝも
神功皇后紀乃誓約と稱ひしとある也
ありれそりり 蟻北門渡れもこりり亦も同一ノ所來道也
とていりり也

前陰ハ肛門とのる會陰もはる名を同しすそ一はれ也
らととてやり○蟻の徳野治よら中古を後も宿一過とれ也
給澤とすそ今れ信勢系れ也とありり流る也
△わぬ 有在るをよめり生の増體とてりり有ハ無ニ對し左も没
對とるらり在ハ小り市有久人在市此とてりり或字もよめり
あふと ともよめり又主人とよむ律代紀よぬてぬ及るも家よらぬ
のどかふる島よあつととぬ○お信は郷をらつとてりりもとてりり

△わぬ 有在るをよめり生の増體とてりり有ハ無ニ對し左も没
對とるらり在ハ小り市有久人在市此とてりり或字もよめり
あふと ともよめり又主人とよむ律代紀よぬてぬ及るも家よらぬ
のどかふる島よあつととぬ○お信は郷をらつとてりりもとてりり

信勢物語より下もわけをとり又法社れは飯とよめり上卿れは
りみり下つふもさよめり世説ニ設主人とてりり
あふと 或とよめり非必之辭と註せりも疑とてりり細をれり
日よ又りしよめり人の略ぬへー又りりつとてりり助語辭ハ不
指名其人指名其事但以或字代之とてりり梵書ハ有人とも有云も
んてりり律代紀ハ一書とありりもみ古事紀ハ一時とありりも
さ同いさつとてりり一謂ハのどとてりり

あふと 吾とよむもさつとてりり其人ハ對してつれとてりり盛衰記もさ
とり今これといふも同し○式信濃國筑摩郡ハ阿禮神社りり今中山道塩
尻ハ神号りりも○稗田阿禮ノ事ハ古事記の序ニ詳し○村々自紀
りよめりりりり也へー○俗ハ彼とてりりもとりりてぬと稱え
ゆりりり也へー○俗ハ彼とてりりもとりりてぬと稱え

あふと 吾とよむもさつとてりり其人ハ對してつれとてりり盛衰記もさ
とり今これといふも同し○式信濃國筑摩郡ハ阿禮神社りり今中山道塩
尻ハ神号りりも○稗田阿禮ノ事ハ古事記の序ニ詳し○村々自紀
りよめりりりり也へー○俗ハ彼とてりりもとりりてぬと稱え
ゆりりり也へー○俗ハ彼とてりりもとりりてぬと稱え

あふと 吾とよむもさつとてりり其人ハ對してつれとてりり盛衰記もさ
とり今これといふも同し○式信濃國筑摩郡ハ阿禮神社りり今中山道塩
尻ハ神号りりも○稗田阿禮ノ事ハ古事記の序ニ詳し○村々自紀
りよめりりりり也へー○俗ハ彼とてりりもとりりてぬと稱え
ゆりりり也へー○俗ハ彼とてりりもとりりてぬと稱え

駿河より頼朝に富士野の狩をまつはり於て狩せり兼久り申納之
家仍ほもあつり斬らふ

あわよりとこに 荀子は青出之藍而青於藍と云ふる所の如き事あり

嘗てあつとよとよの杜鵑あつりもこに夢れつらふ

△あつと 足音はあはれおととあつ流もゆり新探字流より跳と何暇

おとよあり行嚮やとととと今りおとつり或は定とよあり

和訓栞前編二



